

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：25301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2019

課題番号：15K01526

研究課題名（和文）インクルーシブ教育に向けた中学校体育授業における合理的配慮の提供に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Providing Reasonable Consideration in Junior High School martial arts Class in Japan

研究代表者

京林 由季子 (Kyoubayashi, Yukiko)

岡山県立大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：20234396

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中学校武道授業に焦点を当て、武道授業の実施状況と生徒の困難さの実態を明らかにすることを目的に、中学校保健体育教員を対象に質問紙調査および聞き取り調査を実施した。その結果、約6割の教員が担当クラスに指導が著しく困難な生徒がいると回答し、発達障害を含め非常に多様な生徒を対象に武道授業を実施している実態が明らかとなった。困難さへの配慮・支援として複数教員体制やペア学習・グループ学習により個人差への対応や安全面の配慮が行われていたが、複数教員体制は進んでおらず約7割の教員が1人で武道授業を担当しており、全体の指導と個別の配慮・支援とのバランスを取ることに苦慮していることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中学校保健体育科の中で平成24年より必修化された武道授業に焦点を当て、中学校保健体育教員への質問紙調査および聞き取り調査により、それまでほとんど行われていなかった障害等により特別な支援を必要とする生徒が武道授業において示す困難さの実態と困難差への配慮・支援について実証的に明らかにした。今後のインクルーシブ体育の実践に向けて、武道授業における合理的配慮の提供やユニバーサルデザインの授業づくりの基礎的資料を提供できる点に本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to conduct a questionnaire survey and a hearing survey for junior high school health and physical education teachers with the purpose of clarifying the actual situation of junior high school martial arts lessons and the difficulty of students in martial arts lessons. As a result, about 60% of the teachers answered that some students had difficulty in teaching due to developmental disabilities, etc., and it became clear that martial arts classes were conducted for a wide variety of students. As a consideration and support for students' difficulties, a multi-teacher system, pair learning, and group learning were used to address individual differences and give consideration to safety. However, the multi-teacher system has not advanced, and about 70% of teachers are in charge of martial arts classes, suggesting that it is difficult to achieve both comprehensive instruction and individual consideration and support.

研究分野：特別支援教育

キーワード：体育科教育 武道授業 保健体育科教員 特別支援教育 合理的配慮 ユニバーサルデザイン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

平成 24 年より中学校保健体育科において武道授業が必修化され、すべての生徒を対象に武道授業を実施することとなったが、ほとんどが初心者である生徒に対して何をどのように指導するのか、指導体制や指導法の問題、設備・用具等の環境整備など、その検討は始められたばかりであった。

一方で、平成 25 年の障害者差別解消法の成立、学校教育法施行令の一部改正等により、学校教育においても障害のある子どもと障害のない子どもとが共に学ぶインクルーシブ教育システムの構築に向けて、各学校は合理的配慮の提供や基礎的環境整備に努める必要があることが示された。しかしながら、インクルーシブ体育の実証的な研究は少なく、武道授業における障害のある生徒への支援や配慮に関する研究はほとんどなされていない現状にあった。

以上より、本研究は中学校体育科において必修化されたばかりの武道授業について、初めて合理的配慮に関する実証的知見を得ようと構想された。

2. 研究の目的

本研究では、武道授業における合理的配慮の提供に関する基礎的資料を得ることを目的に以下の研究を実施した。

(1) 研究 1: 中学校武道授業の実施状況と授業における指導の困難さの実態調査 (1)

中学校での武道授業が全面実施となった直後の、武道授業の実施状況と武道授業における生徒の学習上又は行動上の困難さの実態について明らかにすることを目的とした。

(2) 研究 2: 中学校武道授業の実施状況と授業における指導の困難さの実態調査 (2)

前回調査(研究 1)から約 5 年後の中学校武道授業の実施状況と武道授業における生徒の学習上又は行動上の困難さの実態、すべての生徒に分かりやすい授業の実施状況について明らかにすることを目的とした。

(3) 研究 3: 中学校の武道専門教員への聞き取り調査

武道授業における学習面又は行動面で困難を示す生徒の実態、問題状況と配慮について、中学校の武道専門教員への聞き取り調査から事例的に明らかにすることを目的とした。

(4) 研究 4: 教職課程(保健体育)専攻学生の特別支援教育に関する知識と意識に関する調査

保健体育科指導法の授業内容の検討に向けて、現行の教職課程(保健体育)専攻学生の特別支援教育に関する知識と意識について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 研究 1: 中学校武道授業の実施状況と授業における指導の困難さの実態調査 (1)

Z 県教育庁保健体育課の協力を得て、管内の公立中学校 161 校を対象に郵送による無記名自記式の質問紙調査を実施した。103 校(回収率 67%)から 151 人の武道授業担当教員から回答があった。調査内容は、各校の属性、武道授業実施状況(10 項目)、武道授業担当教員の属性(9 項目)、担当教員の武道授業実践に関する意識(8 項目)、武道授業における生徒の困難さの実態から構成されている。調査期間は平成 27 年 11 月~12 月であった。

(2) 研究 2: 中学校の武道授業の実施状況と授業における指導の困難さの実態調査 (2)

民間のリサーチ会社に依頼し全国の中学校体育教員を対象に質問紙調査を実施し 107 件の回答を得た。調査内容はフェイスシート 6 項目、武道授業の実施状況 2 項目、武道授業に関する意識 5 項目、武道・体育授業における配慮や支援の状況 6 項目より構成されている。調査期間は令和 2 年 1 月~3 月であった。

(3) 研究 3: 中学校の武道専門教員への聞き取り調査

Z 県内の公立中学校の体育教諭 2 名を対象に半構造化面接を個別に実施した。調査内容は 武道授業の実施状況と問題状況:施設の整備、用具の準備、単元計画、技の指導、評価、武道授業における特別な支援を必要とする生徒の問題状況と対応:実態、困難、対応である。

(4) 研究 4: 教職課程(保健体育)専攻学生の特別支援教育に関する知識と意識に関する調査

A 大学の教職課程(保健体育)を専攻する大学生を対象に質問紙調査を実施し 174 名の解答を得た。調査内容は、障害のある児童生徒と授業で関わった経験の有無とその時期 5 項目(選択肢と自由記述による回答)、障害と特別支援教育に関する言葉の知識 13 項目(4 件法による回答)、特別支援教育に関する意識 15 項目(4 件法による回答)であった。調査期間は平成 30 年 5 月であった。

4. 研究成果

(1) 研究 1: 中学校武道授業の実施状況と授業における指導の困難さの実態調査 (1)

1 武道授業の実施状況:武道授業の実施種目は、柔道(48.2%)、剣道(42.5%)、相撲(10.1%)、その他(1.1%)であり、1クラスの平均生徒数は 30~35 人が最も多く、指導者数は 1 名が約 6 割と最も多かった。「外部指導員」の配置は 25.7%、「支援員」の配置は 9.9%であった。

2 担当教員の武道授業実践に関する意識:「とても困難を感じる」「少し困難を感じる」との回答が最も多かったのは、「指導体制」(48.8%)であり、次いで「指導内容(技能)」(46.5%)、「指導内容(知識、思考・判断)」(42.1%)であった。種目別では、「施設の整備」「用具の準備」「指導体制」については「相撲」が「困難を感じる」が多く、「単元計画」「指導内容(技能)」「指導内容(態度)」「指導内容(知識、思考・判断)」「評価」については「剣道」が最も多かつ

た。剣道は、「柔道」「相撲」と比べ準備する教材・用具が多く、剣道着の着装や竹刀の取り扱い方など日常生活ではほとんど経験しないことが多く含まれ指導内容が多いことが関係していると考えられた。

3) 生徒の困難さの実態：通常学級在籍で武道授業に困難を示す生徒がいると回答した教員は48.3%で最も多く、特別支援学級の生徒も含まれていると回答した教員は42.4%、困難を示す生徒はいないと回答した教員は34.4%であった。通常学級在籍で武道授業に困難を示す生徒の内訳は障害の診断名を有する生徒が53.8%であり、診断名としては、発達障害(LD、ADHD、ASD)の診断名を有する生徒が約6割と最も多く、身体障害(肢体不自由、聴覚障害、病弱・虚弱)が約3割であった。柔道と武道について困難さに関する自由記述の回答をテキストマイニングソフト(KH Coder)により分析を行った結果、柔道では頻出後の上位5語は「結べる」「道着」「指示」「聞ける」「話」、剣道では上位5語は「紐」「結べる」「防具」「竹刀」「聞ける」であった。具体的には「道着の帯が結べない」、「防具の装着が困難」などの武道授業特有の着装での困難さや、「落ちて聞いて聞けない」、「指示が聞けない」などの安全面の指示の徹底の困難な状況が多く挙げられていた。そのような困難さに対して、ペア学習やグループ学習などの学習形態の工夫、視覚的支援など提示の工夫、複数担当などの担当体制の工夫により対応していることが明らかとなった。

(2) 研究2：中学校の武道授業の実施状況と授業における指導の困難さの実態調査(2)

1) 武道授業の実施状況：武道授業の実施学年は1学年と2学年で8割以上、実施種目は男女とも柔道が最も多かった。1クラスの平均生徒数は「31~40人」が全体の8割を占め、1クラスの指導者数は7割弱が「体育教員1名」であった。「外部指導員」の配置は7.5%、「支援員」の配置は3.5%と少なかった。

2) 担当教員の武道授業実践に関する意識：困難を感じるとの回答が最も多かったのは「指導内容」(57.3%)であり、次いで「指導体制」(40.4%)、「用具の整備」(36.0%)であった。「指導内容」の内訳は、「指導内容(技能)」が64.7%と最も多く、次いで「指導内容(思考力・判断力・表現力)」が41.2%、「成績評価」が23.5%であった。武道種目による有意差は認められなかった。

3) すべての生徒に分かりやすい授業の実施：すべての生徒に分かりやすい授業のために行っている配慮について最も多かったものは「学習ルールを決めておく」(52.3%)、次いで「ペア学習やグループ学習を取り入れる」(47.7%)、「授業の流れを一定化する」(43.9%)であった。ユニバーサルデザインの授業作りの視点からは、「参加」の視点(「学習ルールを決めておく」「授業の流れを一定化する」)、「共有化」の視点(「ペア学習やグループ学習を取り入れる」)が多く取り入れられていることが明らかとなった(図1)。

4) 生徒の困難さの実態：学習面又は行動面で課題があり配慮を必要としている生徒については、58.9%の教員が「いる」と回答し、特に、柔道では有意に高かった。柔道固有の動きの指導において安全面の指示の理解が課題となることが推察された。内訳では「発達障害」27.5%、次いで「身体障害」24.6%、「発達障害の傾向」14.5%となっていた。「特別支援学級の生徒」の参加10.1%、宗教上の理由やLGBTなどの「障害以外の特別なニーズ」についても11.6%出現していた。障害による特別なニーズを含め、非常に多様な生徒を対象に武道授業を実施している実態が明らかとなった。生徒の困難さへの配慮・支援で成果がみられた自由記述の回答は33記述収集できた。最も多かったのは「複数教員体制」であり、個人差への対応や安全面の配慮に成果がみられたとするものであった。次いで「ペア学習・グループ学習」であり、支援を必要とする生徒に前向きな行動が増えた、支援を複数の生徒で補い合うことができたなどであった(表1)。一方、配慮・支援が難しかった回答は17記述収集でき、最も多かったのは「障害特性」への対応の難しさであり、次いで「教員体制」であった。特に、複数教員体制でない場合、授業時間内で個々の障害特性からくる様々な行動に個別に対応することの難しさから、「手が足りない」、「支援の仕方が難しい」、「個別対応し

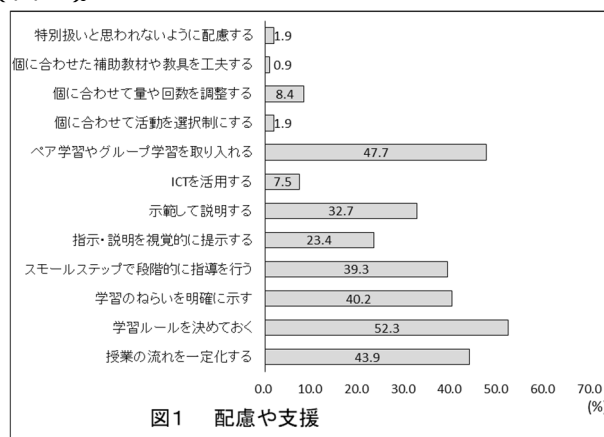


表1 課題のある生徒への配慮・支援について成果がみられた具体例

カテゴリー	記述数	具体的記述(抜粋)
複数教員体制	10	体育教員の複数配置、グループ学習やT2,T3が入り、実践する事で安全に授業が出来た。介助員として教員についてもらい、技能定着をはかった。支援員の先生についてもらう事でスムーズに行なっている。外部指導者の先生方と協力し、個別支援を行ない、皆と同じ活動が出来ようになった。
ペア学習 グループ学習	9	ペア学習で防具の着装の補助をさせている。ペアやグループ学習によってルールや技術が分かるようになった。ペア・グループ学習にすることで、前向きな行動が増えた。毎時間ペアを変えて授業を行う。その子への支援を複数で行なう事が出来る。武道授業だけでなく、日常的にグループ、ペア学習しているので、武道になっても声かけ補助行為が出来る。
安全への配慮	4	常に目の前にいるようにしているので、安全面はしっかり守れた。寝技のみの授業にすることによって、ケガが減った。
分かりやすい 授業作り	4	授業の流れを一定化し、黒板に今日の流れを記入して、今何をやっているかを明確にする。小さな目標を立てて少しずつ出来るようになった。ICTの活用など役割を与える。
個人差への対応	2	個別の課題や目標を掲げさせ、それを成し遂げた時に達成感を得ていた。授業後、数分間の反復練習。
その他	4	見本の相手にする。全体の中でその生徒に対して皆が配慮し、行動できる。友人に聞いて動くようになった。

ていると全体の流れが遅くなる」といった具体例が挙げられていた。全体指導と個別の配慮・支援とのバランスを取ることに苦慮していることが推察された。

(3) 研究3：中学校の武道専門教員への聞き取り調査

聞き取り調査の回答はテキストマイニングソフト KH Coder を用い分析し、総抽出語数、関連語、共起ネットワークを作成し分析・考察した

1) A 教諭：支援の必要な生徒が数名いるが行動面で逸脱する生徒はいないため、ゲーム的要素を取り入れた技能習得や、視覚的に分かりやすい指導の工夫などクラス全体への分かりやすい指導により対応していることが特徴であった。また、剣道部員がモデルになることで生徒同士の相互学習が成り立つなど、剣道経験者である部員の存在が大きいことが述べられていた。合理的配慮の提供については、入学時の保護者との面談、授業開始前の本人との面談のプロセスを経て支援を決定し、授業時に生じた問題にも対応できた事例があった。周りと同じようにしたいという本人の気持ちを大事にし、本人とともに考えるという姿勢で対応していた。

2) B 教諭：通常学級在籍の配慮が必要な生徒と、特別支援学級の生徒と合同で体育授業が実施されるため、支援の必要な生徒の割合が非常に多く、個々の実態も大きく異なるクラスでの指導であることから、教員が個々の生徒の興味を理解した声かけで対応していた。生徒同士の相互学習が難しいクラス特性であるため、地域の武道大会でモデルをみせて生徒が取り組みきっかけを作るなど地域資源を生かした取り組みを工夫していた。しかし、様々な生徒が混在する授業の実施と評価の難しさや、様々な保護者がいるため、学校と本人・保護者の合意形成を図ることの厳しさについても述べられた。

以上より、学校特性、クラス特性、地域特性の違いにより、武道授業で感じている困難さや対応は教員により大きく異なっていたが、中学生というデリケートな時期の生徒に対して、自尊感情をばぐむ指導、頑張りを認める指導を心がけている点は共通していた。また、障害児、健常児双方の運動技能の向上の両立を目指す上でのジレンマがあることが示唆された。

(4) 研究4：教職課程(保健体育)専攻学生の特別支援教育に関する知識と意識に関する調査

1) 接した経験：体育授業と一緒に受けた経験は70.7%であり、「小学生の時に同じクラスに障害のある児童がいたため」とする回答が最も多かった(39.7%)。「印象に残っていること」に関する自由記述の回答は、「参加の難しさ」、「配慮」、「支援体制」、「指導の難しさ」、「行動特性」、「その他」の6つのカテゴリーに分類できた。

2) 知識：障害と特別支援に関する言葉の知識については、「発達障害」という言葉は8割以上の学生が「理解している」、「イメージできる」と回答したが、「自閉症」、「学習障害」、「注意欠如多動性障害」については、4~5割の学生が「具体的にイメージできない」、「分からない」と回答した。

3) 意識：特別支援教育に関する意識に関する15項目に対して因子分析を行った結果、解釈可能な因子として「ネガティブイメージ」、「興味・関心」、「特別支援のイメージ」、「特別視」の4因子が見出された。

合理的配慮やユニバーサルデザインの授業作りなどの指導法に結びつくような知識や具体的な指導法の教授内容の検討が必要と考えられた。

(5) まとめ

研究1と研究2では調査方法の制約から対象地域が異なり、質問項目も一部異なるため一概に比較することはできないが、いずれも教員の約6割が担当するクラスに武道授業の指導が著しく困難な生徒がいると回答していた。通常学級在籍で困難を示す生徒の内訳としては「発達障害」、「身体障害」、「発達障害の傾向」が多いが、「障害以外の特別な支援ニーズ」を有する生徒、さらに交流教育として参加している「特別支援学級在籍」の生徒も一定程度みられるなど、非常に多様な生徒を対象に武道授業を実施している実態が明らかとなった。生徒の困難さへの配慮・支援としては、複数教員体制やペア学習・グループ学習により個人差への対応や安全面の配慮が行われていたが、武道授業の複数教員体制は進んでおらず約7割の教員が1人で武道授業を担当しており、全体指導の中で個別の配慮・支援とのバランスを取ることに難しさを感じていることが示唆された。

障害のある生徒にとっては、格闘技的スポーツである武道授業は固有の困難さが生じるものと考えられるが、その一方、武道は対人的運動形態を通して相手を尊重する教育課題を担える教材(木原,2011)として重要な学びの場となる可能性も秘めている。そのため、多様な生徒の参加を前提に「安全で楽しく効果の上がる」武道授業実践のために指導体制の充実を図ると共に、ユニバーサルデザインの授業作りの視点も取り入れた指導力向上のための研修や資料の充実を図る必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 平田 佳弘 , 櫻間 建樹 , 京林 由季子 , 中尾 道子	4. 巻 9
2. 論文標題 インクルーシブ体育に向けた中学校武道授業の合理的配慮に関する検討 : 中学校武道専門教員への聞き取り調査から	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 環太平洋大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 235-242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) info:doi/10.24767/00000455	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 京林 由季子 , 平田 佳弘
2. 発表標題 中学校武道授業の実施状況と担当教員の意識
3. 学会等名 武道学研究53 (印刷中)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 京林 由季子 , 平田 佳弘
2. 発表標題 武道授業において著しい困難を示す生徒の状況: 中学校武道授業担当教員への質問紙調査から
3. 学会等名 日本体育学会大会予稿集 70, 325
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 京林由季子、平田佳弘
2. 発表標題 教職課程 (保健体育) 専攻学生の特別支援教育に関する意識
3. 学会等名 日本体育学会 69, 272
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 京林由季子
2. 発表標題 教職課程専攻学生の特別支援教育に関する知識 - 教科(保健体育)専攻学生について -
3. 学会等名 日本発達障害学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kyoubayashi Yukiko , Hirata Yoshihiro
2. 発表標題 Comparison of Consciousness of between Specialized Teachers and Non-pecialized Teachers of the Junior High School Martial Arts Class
3. 学会等名 第2回国際武道会議・日本武道学会第50回記念大会Abstracts (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Y.Kyoubayashi, Y. Hirata
2. 発表標題 A survey of students with Special Needs in Junior High School martial arts Class in Japan
3. 学会等名 Journal of Intellectual Disability Research , 60(parts 7 and 8) , pp.793 . (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 平田佳弘・京林由季子
2. 発表標題 中学校保健体育教員の武道授業実践に関する意識 - 岡山県における実態調査から -
3. 学会等名 武道学研究 49 , pp.119 .
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 京林由季子, 平田佳弘
2. 発表標題 中学校武道授業の実施体制と困難を示す生徒の実態 - 岡山県における実態調査から -
3. 学会等名 武道学研究 49, pp.118.
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 京林由季子、平田佳弘	4. 発行年 2020年
2. 出版社 サンコー印刷	5. 総ページ数 56
3. 書名 「インクルーシブ教育に向けた中学校体育授業における 合理的配慮の提供に関する研究」研究報告書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	平田 佳弘 (Hirata Yoshihiro) (30725320)	環太平洋大学・体育学部・准教授 (35314)	